

「わたしたちの希望」

イザヤ書
マタイによる福音書

第21章11節～12節
第12章9節～21節

説教 村上修平牧師

日本は昨年の大震災以来、様々な課題が明らかになってきており、今は希望の見えない時代と言えます。だからこそ御言葉を通して主が与える《希望》をご一緒に確認したいと思います。

マタイによる福音書12章9節～12節をお読みしました。ある安息日に主イエスが会堂に入られると、そこに片手のなえた人がいました。イエスを快く思わないパリサイ人たちが、訴える口実を求め『安息日に人をいやしてもよいか』と意地悪な質問をしました。律法では安息日は一切の労働が禁止されており、命に関わる場合以外は病気の治療さえ禁止されていました。そこで主イエスは「一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか」(11節)とたとえ話をされました。多くの財産を持っている人なら、羊一匹位いなくなってもどうということはないでしょう。しかし、たった一匹の羊しか持っていない貧しい人にとって、それはかけがえのない存在で、たとえ安息日であっても助けてあげないだろうか。ましてこの人は羊よりもはるかに大切な存在だと話され、そして片手のなえた人に「手を伸ばしなさい」と言われました。彼は言われた通りに手を伸ばすと、もう一方の手のように良くなったのです。

彼は石を刻む職人だったと伝承されています。突然仕事ができなくなり絶望の中で、もう神様に祈るしかないと言ったのでしょ。そして、この様に神を求める者を神は受け入れ絶望の穴から救い出して下さるのです。しかも、安息日の掟を破ったこの出来事を契機に、主イエスは命をねらわれ、最後は十字架刑に処せられました。即ち、主イエスは自分の命をかけて彼をいやされたのです。また、主は彼を大勢の中の一人ではなく、この世にただ一人のかけがえのない存在として見て下さいました。主イエスは、私達、一人一人の名前を呼んでかけがえのない存在として扱って下さり、自分の命を捧げてまで私達を救って下さるお方なのです。

この出来事を見た福音記者マタイは、主イエスが生まれる約700年前に活躍した預言者イザヤの預言が遂に実現したことを悟り、聖書のイザヤの預言を引用します。「彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう」(18節)、「彼が正義に勝ちを得させる時まで、いためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない。

異邦人は彼の名に望みを置くであろう」(20～21節)。植物の葦は非常に折れやすく頼りにならないものの象徴です。また、古くなり油を吸わずに煙っている燈心は、使い物にならないものの象徴です。せっかく神様から『あなたを通して神の素晴らしさを伝えたい、教会は《世の光》だ』と言われているにも関わらず、周りの人を明るく照らすどころか、文句や不平を言っでぐずぐずすぶっている。これは私達の姿ではないでしょうか。しかし、普通なら捨てられるはずの頼りない私達を、神は見捨てられませんが、今にも折れそうな私達の祈りの腕をしっかり支え、私達が希望を失い絶望しそうな時も主は私達を照らして下さいます。『お前は世の光なのだ』と私達の使命に立ち返らせて下さいます。

先週長寿者祝福の礼拝が捧げられました。大阪教会に多くの長寿者がいらっしゃることは大きな励みです。信仰によって多くの試練を乗り越えてこられた生きた証だからです。しかし、時々ご高齢の方から、もう体も動かず奉仕もできず申し訳ないという声を聞き残念に思います。神様は『いためられた葦をおらず、煙っている燈心を消さない』と言われるのです。私達の内に希望が見えなくても、主に望みを置きましょう。主イエスの「手を伸ばしなさい」という御言葉にこえ、最後まで祈りの手を上げて祈って下さい。特に、私達の周りにいる多くの希望を失った方々のために祈って下さい。祈りは必ず聞かれます。祈りを通して神は確かに働いて下さいます。これが私達の希望です。

イザヤの時代も希望の見えない暗黒の時代でした。夜を守る見張りは人々に『まだ夜だ。しかし朝はそこまで来ている。あなたがたの救いはもうそこまで来ている。希望をもって待ちなさい』(イザヤ書21章11、12節より)と伝えま。見張りは、教会の姿を表しています。私達教会は耳をすまし目を凝らし、夜明けを、主イエスの力強い業、希望、愛をいち早く見つけて、本当の幸いを求めながら見つけられずにいる方々にお伝えするという大事な役割を託されています。この《恵みの務め》を喜んで果たさせていただきたいと思ひます。神様が照らして下さいますから私達一人一人が希望の光なのです。

(記 説教要約奉仕者)